

2024 年度 関西学院高等部 学校評価を終えて

関西学院では、学校教育法の改正を契機として初等部・中学部・高等部が互い連携をとりながら整合性のとれた学校評価を実施する制度を構築してきました。また、関西学院が幼稚園から大学院まで連なる総合学園である強みを生かし、接続する学校の教員でもある先生方に、専門的な視点からのご意見をうかがうことで、第三者評価と学校関係者評価の両方の性格を併せ持つ「第三者評価／学校関係者評価」を導入しています。今年度は高等部内の自己評価に対して、教職教育研究センター教員、千里国際中等部・高等部校長からの第三者評価／学校関係者評価をいただきました。

関西学院独自の評価項目として「キリスト教主義教育の実践」を設定し、学校評価ガイドライン（文部科学省、平成 28 年改訂）で示された学校運営における12 分野の項目の中から、「教育課程・学習指導」、「生徒指導」を選び、さらに高等部は重点的課題として、「教育環境整備」、「人権教育」を設定して実施しました。また、グローバル教育や探究型授業を含め、国際的な諸問題を含む国内外の社会的課題の解決への関心・意欲の育成のため「国際理解教育」を継続しました。また、アンケート調査に関西学院のスクールモットー

“Mastery for Service” についての質問を「学院共通項目」として加えました。

2024年度の学校評価実施にあたっては、それぞれの評価項目について生徒・保護者・教員のご意見を伺うためにアンケート調査を行い、客観性を高める工夫をいたしました。今年度の回収率は、生徒1,070人・93.6%（前年度回収率100%）、保護者 840 人・73.5%（前年度回収率79.3%）、教員 55 人・100%（前年度回収率 100%）でした。

今年度も、各項目の生徒・保護者・教員からのアンケート結果を参考に、現状の説明・評価・分析をいたしました。そこから見出せる高等部の課題を明らかにして、第三者評価者の評価を基にしながら今後の改善につなげていく所存でございます。

2025年3月6日

関西学院高等部

部長 枝川 豊

学校評価

教育理念・使命・目標

高等部の教育目標は「イエス・キリストを通して、人と世界に仕える使命感と実力を養い、豊かな心と真摯な態度を備えた人格を培う」としている。礼拝、聖書科授業、宗教的行事を通してイエス・キリストから生き方を学び、他者に、社会に、世界に対して仕えるため、性別、年齢、国籍など様々な違いを超えてお互いの個性、人格、多様性を認め合い、「凡ての人に仕える」、「地の塩、世の光」として、「平和な社会を築く担い手」となる関西学院のモットー「Mastery for Service」を体現する世界市民の育成をめざす。そして、一貫教育を柱として、大学で学ぶ力を身につけ、多様な社会の要求に応えうる総合的な人間力を養う。

また、「探究型カリキュラム委員会」を立ち上げ、高等部教育の様々な場面で、授業や行事で、SDGs の達成を目指し、“Mastery for Service” を体現する世界市民の一員として、国内外の社会に自ら関わり貢献できる力を育成する/身につける教育を展開することを目標とする。

2024 年度の評価項目

- ・キリスト教主義教育の実践：高等部の教育の根幹をなすため、毎年の評価項目として設定している。
- ・教育課程・学習指導：重要項目であり、生徒の「学び」が確かなものになっているか、そのためのカリキュラム編成になっているか、検証のために評価項目として設定している。
- ・生徒指導：規律ある生徒の生活環境、および安心して学べる生活環境が整えられているかを検証するために評価項目として設定している。
- ・教育環境整備：共学化から 9 年が経過し見直す為の課題を把握することは重要であり、快適な学習環境を保証するために評価項目として設定している。
- ・人権教育：重要項目であり、グローバル社会において人権を尊重し、多様性が受容される環境が整っているかの検証のために評価項目として設定している。
- ・国際理解教育：探究型活動および授業を通して生徒の国際理解を深めるため、評価項目として設定している。

2024 年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

評価項目 【テーマ】	【キリスト教主義教育の実践】	自己評価	A
目標	建学の精神の体現		
具体的な取組の 状況とその効果 に対する評価	（具体的な取組の状況） ● 生徒のキリスト教に関する理解の向上を目的とした活動を今年度も引き続き行った。その結果、生徒質問 1「高等部の教育にとって、キリスト教はその土台であると思う」で肯定的な回答を 83.7%（昨年度 84.7%）、生徒質問 2「礼拝の時間は大切だと思う。」で 76.2%（昨年度 78.0%）、生徒質問 3「聖書の言葉は共感できる部分がある」で 75.8%（昨年度 79.2%）を得た。 ● 自由出席である早朝祈祷会（火曜日 8:10）の出席状況の向上を毎年目標としているが、平均出席 220.4 名（昨年度 248 名）であった。 ● 高等部にハンドベルが入り、創立記念礼拝、クリスマス礼拝で演奏された。 ● 能登半島地震で被災された方々のための献金、子ども食堂でのボランティア、くるみ幼稚園でのお残り保育のお手伝い、コンタクトレンズケースのリサイクルなどの活動を行った。特に夏にボランティア委員 6 名が能登半島の被災		

	地を訪問し、ボランティアを行った。その結果、生徒質問4「高等部は、キリスト教関連団体（教会・ボランティア）に関心を持っている」で肯定的な回答が73.0%（昨年72.3%）とこれも昨年度同様の評価を得た。ボランティア委員会には、現在30名の委員がいる。 ● 保護者質問1「高等部が実施しているキリスト教主義教育は、子どもの人間的成長に寄与している」の肯定的な回答の割合は86.2%（昨年86.6%）と多くの保護者が昨年同様強い関心を示した。保護者の方へのキリスト教理解の取組の一環として、保護者の集いの一つである「聖書を学ぶ会」を行っている。その出席者数も現状維持をしている。 （取組の効果に対する評価） ● 今年度はわずかではあるが、昨年度より評価が下がった。毎年、受洗者が与えられていることや、宗教行事・ボランティア活動を担う生徒が変わらずにいることから考えると、質の低下ではなく、見え方の問題、他の目立つプログラムが多くなったことに原因があるのではないかと考える。
今後の方策	● クリスチャン教員が減少する中で、キリスト教主義教育をさらに浸透していくためには、近隣教会の牧師を積極的に奨励に呼び出すこと、関西学院内のクリスチャン教職員に今以上に奨励を依頼し、魂の育成に励むことが必要だと考える。

評価項目 【テーマ】	教育課程・学習指導 【関西学院大学への院内推薦制度に基づく学校として、その制度を活かし、基礎的な学びの上に、主体性や探究型などの時代に適応した学びを実現するカリキュラムや、生徒が積極的に選択できる進路指導の仕組みが構築されているか】	自己評価	B
目標	● 接続する大学で主体的に学ぶ力を保証し、多様化・不安定化する社会に対応できる学びの力や姿勢を習得する。具体的には「1. 基礎学力の向上」、「2. 課題を発見し、解決策を考える探究型の学びを深める」、「3. 興味や関心に応じて深く学ぶ」を目標として掲げる。 ● 学習に躓きのある生徒には補習などきめ細やかな対応をする。 ● 的確な自己分析と、大学に関する情報収集を結びつけ、学びたいことや将来のビジョンに即した進路選択と、その実現に向けた指導を行う。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	（具体的な取組の状況） ● 基礎学力向上の取組として、1年生から3年生までの継続的なサポート体制ができ、未修得単位の回復と基礎学力向上に努めた。 ● 主体的な学び・探究型の学びについては、WWL コンソーシアム構築支援事業（以下 WWLC）の経験を活かした探究科目の拡充を進め、7科目を開講し、より多くの生徒の受け入れ、多くの分野をカバーできるようにした。また、担当教員間で生徒の主体的な学びの過程（知識獲得・課題発見・考察・議論・実践・発表など）や教員による評価の仕組みについての実践と蓄積を重ねた。また、1年生の終盤から2年生にかけて、学年全員が地元地域の活性化策立案に取り組む地域探究のプログラムを継続して実施している。 ● 探究型の学びの発展のため、広く発表校を公募しての「探究の集い」を今年度も12月に主催(Classi 社共催)。コンテスト部門のプレゼンテーションとオープン部門のポスター発表を合わせ、全国各地から36校・約300名の参加があった。 ● 受験にとらわれない学びの核として位置づける3年選択授業において、外部人材を活用して、アントレプレナーシップ講座やアート探究、写真演習、舞		

台表現、会計学などの新たな講座の導入を進めている。

- WEB の自己分析ツール (Ai-GROW) や、進路情報の収集・整理、自己分析との関連付けを意図したワークブック (マイナビ社) など、外部サービスを活用して 3 年間を通して進路の意識を積み上げるプログラムを運用。90%以上が内部進学する本校の特性を踏まえ、学びたいことで選ぶ進路の指導を進めた。

(取組の効果に対する評価)

- 今回の結果では、生徒、保護者、教員を問わず、全体的に肯定的な評価の内容が大きく変わった。「強くそう思う」と「どちらかというと思う」をあわせた評価を肯定的な評価とすると、肯定的な評価の割合は昨年度と変わらないものの、「強くそう思う」の割合が減じ、「そう思う」の割合が増えている項目が多く見られた。肯定的な評価全体の割合は変わらないものの、その質は明らかに下がっていると捉えるべきである。
- 以下、「強くそう思う」の特に大きな変化を挙げる。
- 高等部らしい学びを提供されているかについて、生徒 [質問 5] で 39.9% から 31.6% へ (昨年比 -8.3)、教員 [質問 10] で高等部らしい学びを意識した教科目標の設定について、46.4% から 38.2% へ (昨年比 -8.2)
- 新しい学力観に基づいた教科目標の設定について、教員 [質問 11] で 32.1% から 27.3% へ (昨年比 -4.8)
- 質の高い授業のための教材・手法の研究について、教員 [質問 14] で 44.6% から 32.7% へ (昨年比 -11.9)
- 興味深い授業があり、知的好奇心が満たされているかについて、生徒 [質問 10] で 28.6% から 23.6% へ (昨年比 -5.0)
- 2,3 年生の選択授業が充実しているかについて、生徒 [質問 11] で 40.5% から 35.7% へ (昨年比 -4.8)、選択授業による個々の生徒に応じた学びについて、保護者 [質問 5] でも 27.0% から 20.4% へ (昨年比 -6.6)
- 以上のいずれも、「強くそう思う」が減じ、それと同じくらい「どちらかといえばそう思う」が増加してはいるものの、全体として評価が下がっている。
- 一方で、否定的な評価 (あまりそう思わない・まったくそう思わないの合計・以下同) では、教員 [質問 10] で高等部らしい学びを意識しての教科目標の設定について 14.3% から 9.1% へ、[質問 11] の新しい学力観に基づいた教科目標の設定も 21.4% から 14.5% へと減じている。高等部らしい学びや、それを新しい学力観という社会的な要請に沿わせることに一定の対応ができていると考えられる。
- また、高等部らしい学びを体現する 2,3 年生の選択授業に関して、生徒・保護者においては肯定的な評価が減じているのに対し、教員 [質問 17] では肯定的な評価の割合は 89.3% から 94.5% へ高まっており、乖離が見られる。探究型科目の拡充が進められているなかで、その意図が生徒には十分に伝わっていないこと、全員の希望が叶えられないという物理的な問題なども原因と考えられる。
- 選択授業と関連し、今後の高等部らしい学びの核となる探究型の学びについて、社会的課題への関心や取り組む姿勢の育成についても、生徒 [質問 12] で「強くそう思う」が 31.0% から 26.1% へ (昨年比 -4.9)、教員 [質問 18] でも 51.8% から 43.6% へ (昨年比 -8.2) と、低下が顕著である。
- 高等部らしい学びと並んで、最低限の基礎学力の確保も重要な課題である。教員 [質問 15] において、適正な知識・技能の定着について 85.5% が肯定的な評価をしている一方で、[質問 16] 補習等による個々の生徒に応じた学びについては 72.7% にとどまり、「強くそう思う」も 12.7% と、他の質問よりも

	一段低い評価となっている。 ● 評価においても、生徒〔質問 13〕で的確に評価されているかについて 23.0%から 20.0%へ（昨年比－3.0）、〔質問 14〕多様な手法・視点での評価についても 23.7%から 20.5%へ（昨年比－3.2）と、低下の傾向にある。教員でも〔質問 20〕多様な手法や観点で的確に学力を評価しているかについて、「強くそう思う」が 28.6%から 23.6%へ（昨年比－5.0）を示しており、探究型科目だけでなく、通常授業でも探究的な要素（個々の関心を掘り下げる、自ら学ぶ、暗記でなくアウトプットで評価する、など）が取り入れられている状況で、その難しさを示していると考えられる。 ● ただし、2 年生全員を対象にした地域探究プログラムは定着したといえ、生徒は実地研修やより実践的な計画、自治体の方に向けてのプレゼンテーションなど、実社会に働きかけることのできる貴重な経験が出来ている。 ● 高等部主催の探究の集いも、高いレベルの高校生の研究発表に触れられる機会としてだけでなく、生徒が生徒交流プログラムそのものを企画運営すること自体が貴重な学びとして定着した。 ● 今年度、進級・推薦・卒業、進学などに関する説明において顕著な変化が見られた。進級・推薦などに関する適切な説明について、生徒〔質問 6〕で「強くそう思う」が 43.7%から 37.9%へ（昨年比－5.8）減じているのに対し、教員〔質問 12〕では「強くそう思う」が 50.0%から 63.6%へ（昨年比＋13.6）上昇しており、乖離が見られる。 ● また、関西学院大学に関する情報を知り、進学について考える機会に関して、生徒〔質問 18〕では「強くそう思う」が 39.4%から 30.3%へ（昨年比－9.1）、教員〔質問 24〕では関西学院大学との連携について 39.3%から 25.5%へ（昨年比－13.8）大きく減じている。 ● また、昨年度に最も大きな課題と指摘した、生徒の自己分析から始まる、大学進学にとどまらない進路指導については、今年度も同様の結果となった。的確な自己分析とその表現、進路指導への活用に関して、生徒〔質問 15〕は的確な自己分析ができているかに「強くそう思う」が 23.3%から 17.3%へ（昨年比－6.0）、〔質問 16〕的確な自己分析の表現と活用について 22.5%から 15.7%へ（昨年比－6.8）となっているのに対し、教員〔質問 22〕では自己分析の活用について「強くそう思う」が 7.1%から 12.7%へと（昨年比＋5.6）上昇しており、乖離が見られる。ただし、その割合は他に比べて高い水準とは言えない。 ● 大学進学にとどまらない、広く生き方に関わる進路指導については、生徒、保護者、教員とも昨年度から大きな変化はない。高等部の進路指導については、概ね方向性は合っているものの、実際に自己分析と学びの関心、学力成績と大学の進路選択とを結びつける実際の局面に不安が残っているのではないかと考えられる。
今後の方策	● まず、生徒を大学へ進学させるにあたり、特に成績下位層に対する基礎学力の保障はより一層強化する必要がある。 ● そのうえで、高等部らしい学びを、新しい学力観という社会的な要請に沿わせて具現化するにあたり、教科目標の設定に向けての歩みを止めないことが必要である。 ● 今後、高等部らしい学びを象徴する選択授業、ことに探究科目において、高等部らしい学びの再定義と、生徒への啓発が重要となる。 ● また、今後、探究科目を拡充させていくのであれば、評価方法についてのレベル向上と、生徒への理解が重要となる。そしてそれは探究科目に限られたことではなく、探究的な要素を取り入れる通常授業でも必要なことであり、

	高等部らしい学びと一体となった課題と言える。 ● 本校の核となる推薦制度においては、はっきりとした学びの目的意識を持たせる必要がある。民間企業のサービスを利用して、自身の行動特性や興味関心について分析する手段や機会は充実させてきたが、積極的に学問と結びつけるプロセスが重要となる。自身の身の周りのレベルで問題意識を持ち、それを進学動機としていけるようなプログラムとしていく必要がある。それには、単に学科の成績だけでなく、内容に関心を持ってもらえるような授業、ひいては教科の目標設定、自己分析や興味関心を言語化できるスキル、そのために有効な各種プログラムのスケジュール再編が含まれる。 ● 折しも、昨年には3年選択授業の再編を検討する必要があると記載したが、今年度をもって3年選択授業での大学入門科目の開講を取りやめることとした。進学に関する情報提供の機会として3年生では遅いという理由からであるが、代わりに来年度から2年次に複数回に渡って各学部の模擬講義を実施していただくような改革を進めた。生徒が明確に各学部の学問を知る機会を増やし、曖昧な志望理由やミスマッチを減らすことが目的であり、初年度となる2025年度の内容が重要となる。
--	--

評価項目 【テーマ】	生徒指導 【自主性を育み、気持ちよく集団生活を送るための生活指導を徹底】(重点)	自己評価	A
目標	学校のルールを守り、他者を気遣い、規則正しい生活習慣を養う。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	(具体的な取組の状況) 今年度特に重視したことは、自律した学校生活を送るためのルールを遵守すること、いじめを許さない環境づくりである。具体的には以下の項目が該当する。 ・守るべきルールやマナーを明示して指導(生徒21、保護者14、教員28)) ・不正やいじめを毅然として許さない(生徒22、保護者15、教員29) (取組の効果に対する評価) 上記の重点項目を含め、設定したすべての項目で、生徒は高く評価している。 ・「20 生活の指導を適切に指導している」、88.3%(昨年比+5.0) ・「21 守るべきルールやマナーを明示」、90.6%(昨年比+4.0) ・「22 不正やいじめを毅然として許さない」、87.5%(昨年比+2.5) ・「23 問題やトラブルが発生した際、適切に対応した」、83.5%(昨年比+3.5) これらの要因は、年度の最初、問題が発生しそうな時、問題を指摘された時、Classi を利用して具体的な問題点や改善ポイントを明示しながら指導したことがあげられると思う。 同様の重点項目で保護者は、 ・「14 規律正しい生活が送れるように指導」、81.8%(昨年比+0.1)と昨年同様の評価を得た。 ・一方「15 高等部は不正やいじめを毅然と対応している」、83.4%(昨年比-3.0)は、全体として高い評価を与えられているものの、昨年より3ポイントも下がっている。この要因として考えられることは、本校で2022年度にいじめ問題が発生した際、「学校側はいじめを許さない」という明確な発言や行動を行った。それに対し保護者はこれを高く評価した(2022年度保護者89.1%、昨年比+6.8)と思われる。一方3年生が卒業し、新1年生が入学し、そのような姿勢を		

	目の当たりにしなかった学年が増えた昨年度、同じ項目で保護者は 86.4%（昨年比－2.7）であった。全体としては高い評価だが、昨年比は下がった。同様に今年度はさらに 1 学年が入れ替わった結果、保護者の学校側の姿勢に対する評価は 83.4%（昨年比－3.0）となった。しかしいじめ問題が発生する前の 2021 年度同内容の保護者アンケートの肯定的評価が 84.1%、その前年 2020 年度同内容の保護者アンケートが 84.2%であることを考えると、いじめ問題の前の水準に戻ったと考えられる。むしろ問題が発生する前年 2021 年度に比べても 1.1 ポイント高くなっている。 教員アンケートでも生徒指導は高い評価をしているが、昨年から評価を下げた項目がある。 ・「28 守るべきルールやマナーを明示し、指導している」は 78.2%（昨年比－3.9）である。これは生徒「21 守るべきルールやマナーを明示」、90.6%（昨年比＋4.0）、保護者「14 高等部は、生徒が規則正しい生活が送れるよう適切に指導している」81.8%（昨年比＋0.4）を考えると、教員のみ下がっている。要因として、明確にルールを明示しているにもかかわらず、教員集団として意思が統一されていない、と不満を感じている方が増えたと考えられる。
今後の方策	・他者を気遣い、規則正しい生活習慣を養うため、今年度は問題行動が起きる前に注意すべき事の注意喚起、・起きた際の内容（何がいけないのか）の共有・その後に向けた指導（改善すべき点を明確に可視化）を行った。この点は継続したい。一方近隣から特に登下校マナーに関する注意を受けることが多かった。道路状況と生徒の数を考えると難しい点もあるが、このような指摘を頂いた場合は、問題点・改善すべき点を明示し、Classi を用いて具体的かつ可視化した注意喚起を更に行いたい。 ・またいじめを許さない環境づくりに関しては、学校側として最も重視していることを明確に発信し、いじめにつながるいじりを含めて、適切かつ早期な対応を取りたい。

評価項目 【テーマ】	教育環境整備 【生徒・教員の学びを促進する学校設備の整備・改善】	自己評価	A
目標	● 新しい学びに対応した施設・設備の充実を図る。 ● 探究型授業を軸としたカリキュラムの大幅改訂を見据えた、新しい時代の教育に対応できる教育環境をハード・ソフトの両面において整備する。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	（具体的な取組の状況） 1. 引き続き、生徒・保護者・教員の意見を聞きながら校舎の整備と維持・管理を行った。今年度は、生徒総会での問題提起を受けての懸案事項であった食堂の充実について、メニュー等のソフト面及び、什器類のハード面両方について全面リニューアルを実施できた。また、昨年度からの継続案件として、こちらも生徒総会からの要望にもとづき着手した、普通教室の生徒用机・椅子の更新を完了させた。 2. ICT 環境については、引き続き常駐の ICT 支援員のサポートにより、機器・ネットワークの運用や、1 人 1 台タブレット環境下での生徒・保護者へのサポートについても順調に推移している。また、今年度は文部科学省の DX ハイスクール事業に採択され、補助金を原資としたアクティブラーニング型教室の整備を実施する予定である。 3. ここ数年間の総合評価を踏まえ、築 30 年以上となる高等部校舎を、新しい教育の形に対応できるよう抜本的にリニューアルするための検討を関西学院施設部との間で開始しており、今後も継続する予定である。		

	(取組の効果に対する評価) ● 今年度も高等部の教育環境整備に関連する殆どの質問項目（生徒(問 24、26、27)、保護者(問 17～19)、教員(問 33～36)) について、90%を超える高い肯定的評価を示している。引き続き本校の教育環境の整備が概ね順調に進められていると判断して良いと考える。数年前より肯定的評価が大幅に下落し、懸案としてあげていた、生徒と教員に共通する質問「全ての生徒が快適な学校生活を送るための施設・設備（トイレ・更衣室・食堂など）が十分整備されている（生徒(問 25)・教員(問 35))」においては、3年前からの推移として、生徒:72.2%→82.1%→86.9%→88.5% 教員:64.2%→62.5%→71.4%→92.7%となり、今年度はいずれも上昇した。生徒・教員共に、食堂改修等この数年間の取組が評価されたと考えられる。 ● ICT 環境の整備・運用が順調であることは、関連する質問（生徒(問 26～27)・保護者(問 19)・教員(問 38～39)) にて引き続き肯定的評価が 90%を超えていることから確認できる。一方で教員の（問 39）「高等部は生徒 1 人 1 台環境を有効に利用している」について推移を見ると、94.7%→92.8%→90.9%と昨年度より更に約 2 ポイント下落した。この原因としては、教員の ICT 活用能力の水準がこの数年間で大きく向上しているのに対して（問 40:89.3%→96.4%→96.4%）、より高度な活用を期待してのものであると捉えている。この期待に沿うべく、計画しているアクティブラーニング型教室等の整備や抜本的な校舎リニューアルを実現させていきたいと考えている。
今後の方策	● 施設・設備の整備についてはこれまでと変わらず、生徒・保護者・教職員の声を聞きながら良好な維持・管理を続ける。 ● ICT 環境においては、関西学院の新たな「情報化計画」に沿った形で DX 化を促進していく。 ● （具体的な取り組みの状況）の 3. で示した、「老朽化した高等部校舎の抜本的リニューアル」は、現在高等部で進行させている、探究型のカリキュラムを柱としたソフト面での、高等部の学びの教育改革の完成形が見えてくる中で、その実現のためにも必須であると考えている。現在も食堂等のリニューアルを随時実施してきているが、パッチワークにならず、長期的な展望のもとで最終形の検討を行い、その方針に沿った環境整備・改善となるよう引き続き関西学院 施設部との検討会議を継続していく。

評価項目 【テーマ】	人権教育 【担任主導の時間を増やし、生徒が自分事として考えられる人権教育プログラムの実施】	自己評価	B
目標	● 聖書の価値観に立ちながら自己と他者の「尊厳」について理解し、互いの「尊厳」を守り合えるようになる ● 自身の内にある差別意識や偏見を客観視できるようになり、社会に存在する不平等と差別を直視する勇気を持つ ● 差別の具体的な歴史や現状を共感的に理解し、実際の差別に対して毅然と立ち向かえる態度を身に付ける ● 身に付けた人権意識をもとに、人々の尊厳が守られる社会的正義や平和構築のために貢献できる人になる		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	〈具体的な取組の状況〉 ● 各学年で、多様なテーマで人権教育プログラムを実施した。各学年のテーマと実施内容は以下の通りである。		

〈1年生〉

1学期：テーマ「いじめといじりの違いって?」、中休み2回を使用

2学期：テーマ「自分の尊厳と相手の尊厳を守るとは」、中休み3回、LHR1回を使用

3学期：テーマ「性の多様性ー性別って何?」、LHR2回、中休み1回を使用

〈2年生〉

1学期：テーマ「レイシズムー人種主義を考える」、中休み3回、LHR1回を使用

2学期：テーマ「部落差別を考える」、LHR3回を使用

〈3年生〉

1学期：テーマ「レイシズムー人種主義を考える」、中休み3回、LHR1回を使用

2学期：テーマ「これから生きていく上で、人との繋がりについて」、中休み2回、LHR1回を使用

- *本年度は、様々な人権課題の根幹に関わるテーマとして「レイシズム」を扱った。自らの差別性や日本の加害の歴史、あるいは集団としての差別意識に触れるものであることから学ぶ側の抵抗感が予想されたが、臆さずテーマに挑んだ。
- *ゲスト講師としては、当事者だけではなく、活動の最前線で問題解決に取り組んでおられる方々をお招きして解決策の提案まで話を伺ったり(2,3年1学期、3年2学期)、ワークをして頂く中で、具体的に(コミュニケーションの)技術を身につけたりできるような新しい試みを行なった(1年生2学期)。
- *各テーマについて、プログラムの最初に生徒への事前アンケートを実施し、無意識の中の差別意識に気がつき、問題が自分事であることを知ることができるように工夫をした。また、他の生徒の回答状況を知ること、自らの意見や意識を客観化できるようにも工夫した。
- *2年生のテーマ「部落差別」では、昨年度フィールドワーク参加者の現3年生の生徒から、2年生に向けて、自らの体験の感想と、差別について考えることを率直なメッセージとして語ってもらった。
- *2年生のテーマ「部落差別」の人権プログラム終了後、講師の友永さんが支部長をされている大阪の住吉地区へ、教員フィールドワークを実施した(12/24)。学年団から4名、人権教育推進委員会から2名が参加するなど、教員が現場で理解を深める環境を準備できた。
- *1年生の尊厳教育では、昨年に引き続き、全クラスの学級委員に自分たちの体験にもとづいたロールプレイ動画を制作してもらった。自分たちの仲間が登場する事例動画をもとにディスカッションをすることで、より身近な事柄として議論することが目的である。
- *人権テーマに関して、担任に率直な思いや考えをクラスの生徒に語ってもらう時間を増やしたり、担任主導で生徒が活動的に議論したりできるような手法の工夫をした。
- *各プログラムを構成する際、講師との打ち合わせ段階から学年の人権教育推進委員の参加を促し、前年度以上に詳細に打ち合わせるようにした。具体的な準備へ協力を得ることで、より学年の意向を取り入れられるよう試みた。

〈取組の効果に対する評価〉

- 学校評価アンケート生徒(問29)「高等部としていじめの問題を把握し、その防止に取り組んでいる」という項目は、「どちらかといえばそう思う」を含めると昨年度89.1%から今年度91.0%へ増加した(2年連続で増加)。保護者(問20)は昨年度86.9%に対し今年度86.3%と0.6%減少した(2年連続で減少)。しかし、今年度から、各学期にいじめ予防に特化したアンケート「B-SAFE記述

	版(旧いじめアンケート)」を始めたところであり、アンケート配布時にも学校としていじめを許さないというメッセージを明確に発している。また、昨年度より発信を始めた「人権プログラム Report」でも、いじめをテーマとしたプログラムの取組を紹介しているが、保護者に対してはこれらの効果が現れていない。同項目の教員(問 43)は、昨年度 98.2%と数値的には同じであるが、「強くそう思う」が 51.8%から 60.0%へ大きく伸びた。生徒(問 29)と合わせた改善傾向には、昨年に引き続き、テーマ「いじめといじりの違い」の人権プログラムを、さらに時間をかけて実施したことが影響したと考えられる。 ●学校評価アンケート生徒(問 30)「人権プログラムを中心に、高等部はさまざまな人権問題について意識を高める教育を行っている」については、昨年度 90.4%から今年度 92.3%へ上昇した。人権プログラムの中で様々な試みをしていることが生徒に伝わっていると考えられる。同内容の教員(問 44)の肯定的な評価も昨年度 91.1%から今年度 96.4%と増加した(2 年連続増加)。担任がクラスで語る場面が増えたことで、自らが人権教育を担う意識が向上していることが背景にあると考えたい。ところが、保護者(問 21)「生徒自身が種々の人権問題について、より関心を持つようになったと家庭で感じる」は昨年度 71.4%から 67.4%と大幅に減少した。生徒の人権問題への関心を保護者が感じるためには、家庭での親子間コミュニケーションという別の課題も含まれるが、少なくとも、今年度より始めた、「人権プログラム Report」の中の「家庭でのディスカッションポイント」の記載には効果がないことが分かる。また、生徒の(問 30)と保護者の(問 21)のギャップの裏には、受け身ではない「自分事として考える」人権教育が十分に行えていないことも原因の 1 つとして考えられる。 ●学校評価アンケート生徒(問 28)「一人ひとりの生徒の人権が尊重されている」は、昨年度 92.6%から 93.3%へ上昇したものの、その中で「強くそう思う」は 40.5%から 34.9%へと減少している。これは、教員自身の人権意識向上に向けた直接的な働きかけが、教員人権研修、フィールドワーク、人権プログラム実施時の学年会での議論、あるいは B-SAFE 記述版の共有時に気をつけるべき教員の言動の確認程度であることが原因として考えられる。 ●昨年度のテーマ「障がい者と人権」で、講師としてお招きした鍛冶克哉さんが勤めておられる障がい者自立支援施設メインストリーム協会へ、関心のある生徒と共に訪問し、結果として 4 名が介助者としてアルバイトを始めた。 ●部落差別のテーマで教員対象に実施した住吉地区フィールドワークについて、年度末に再度生徒の参加者を募って実施する予定である。 ●昨年度に引き続き、人権教育推進委員会主導で 9 月に全学年一斉に「B-SAFE 記述版(旧いじめアンケート)」を実施し、アンケート内容を学年団・人権教育推進委員会・生徒指導部・運営委員会で情報を共有しながら迅速かつ慎重に対応した。幸い今年度は、いじめに該当する事例はなかった。
今後の方策	●生徒が「自分事化」できる人権教育に向けて、以下の方策を講じる。 ・扱うテーマの内容が多すぎて、かえって理解を妨げた部分があったため、(特に初めて扱うテーマについては)よく精査し、要点を絞って扱う。 ・尊厳教育では、本来であれば自らの体験を語り合う中で学びの本来の価値を実感できるものである。学級委員の動画視聴・分析だけで終わらず、生徒たち自身が自らの体験を語りあう本来のワークショップの形を取り入れる。 ・学級委員に協力を得たり、可能であれば人権委員などを新設したりすることで、人権プログラムにおけるクラスでの活動を生徒主導で進めていく。 ●教員が参加できるフィールドワークの種類を増やし、人権教育推進委員会から新しい発信をしていくことで、教員の人権教育への意識を高め、生徒の前で、

	自分の言葉で堂々と自らの意見を語れるような後押しをする。 ● 全体の内容構成の改善策として、人権プログラムの計画段階から、学年の人権教育推進委員の意向を大切にしながらテーマや実施時期、講師の選定について考える。その際、今年度実施した「授業内で扱っている人権テーマ」に関する教員アンケート結果を踏まえつつ、3年間で効果的に積み上げていくことのできるカリキュラムを考える。 ● 休み時間を使う日頃の慌ただしい人権教育の実施時間では難しい、じっくりと人権（全般）について考える機会として「人権 Day」のような行事を企画・実施する。
--	---

評価項目 【テーマ】	国際理解教育 【国際的な諸問題を含む国内外の社会的課題の解決への関心・意欲の育成】（重点）	自己評価	A
目標	・ 文部科学省から採択を受けた3年間(2019-2021)のWWLコンソーシアム構築支援事業（以下WWLC）を自走、継続する形で、授業や課外活動などの学校全体の様々な教育活動を通して、SDGsに代表されるような国内外の社会的課題の解決に主体的に関わろうとする姿勢や、多様な価値観を学ぼうとする意識を育む。 ・ 国内外で開催される国際交流プログラムを紹介し参加を促すことを通して、国際理解に関わる学びを深める機会を提供する。 ・ 中期・長期留学、海外語学研修、フィールドワークなどといった国内外での活動への参加を促し、本校でも留学生を積極的に受け入れることで、学校内外での国際交流の場を作り出す。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	（具体的な取組の状況） ・ 今年度は合計10名が海外留学に出発した。内訳は以下の通りである。 2学期：カナダに中期留学生が3名、長期留学生が2名 3学期：オセアニアに中期留学生が3名、アメリカに中期留学生が1名、フランスに長期留学生が1名 来年度の出発が確定した者は4名いる。 ・ 海外からの留学生として、アメリカから1名（AFS）、フィンランドから1名（AFS）、合計2名を第2学年で受け入れた。両名とも本校の授業や学校行事、クラブ活動に積極的に取り組み、礼拝でも感話を担当するなど、日本国内における異文化交流の場を提供してくれた。 ・ 海外の2つの高校からホームステイを受け入れた。4月にはオーストラリアの提携校であるTrinity Grammar Schoolから37名が、1月にはオーストラリアのMeriden Schoolから11名が来校し、ホームステイや学校体験を行った。本校の生徒とバディを組んで授業に参加、昼食を一緒に食べ交流会を実施、クッキングや柔道などの特別授業を体験してもらうなど、実りある国際交流の機会が持てた。なお、Meriden Schoolとはこの訪問を持って正式に姉妹校提携校となり、今後もさらに交流を深めたい。 ・ 6月にはAFSを通じてトルコの教員6名の高等部視察を受け入れた。 ・ 7月には英語科が企画、運営をした英語スピーチコンテスト「Crescent Cup」を昨年に引き続き開催した。生徒11名がネイティブ教員と1対1の指導を受けながら約1か月をかけて準備をし、最後に英語スピーチを披露した。上位3名は兵庫県スピーチコンテスト阪神大会に応募、全員予選を通過し本戦に出場した。その内の1名が1位となり県大会に進出した。その県大会においても3位を受賞するなど、大きな成果を得た。多くの生徒達が放課後に残ってネイティブ教員と共に一生懸命英語の練習をしていた姿が大変印象的であった。		

- ・夏休みにはオーストラリアの提携校 Trinity Grannar School と Meriden School を訪問する 12 日間の語学研修旅行を実施した。コロナ禍以来の語学研修ということもあり応募者も多く、ホームステイの人数の関係上 20 名のみの参加となったが、大変有意義な国際交流の機会を持つことが出来た。
 - ・同じく夏休みに With The World 社と企画した 6 泊 7 日のフィリピンフィールドスタディを昨年に引き続き実施し、13 名の生徒たちが参加した。急速な経済発展を遂げるフィリピンで現地の NGO や大学生と共に、スモークマウンテンを見学したり高校生や子供たちと交流する中で、幸せとは何かを考えるスタディツアーであった。生徒達にとっては大変学びと刺激の多い海外体験となった。
 - ・9 月には初の試みとして「やっぱり楽しい！国際交流！：夏休みに国際交流を体験した高等部生 5 名によるパネルディスカッション」と題した企画を実施し、生徒と保護者を合わせて約 80 名ほどの参加があった。オーストラリアの語学研修、フィリピン研修、サッカー部の韓国遠征、アメリカでのリーダーシップ研修、京都にてアメリカの高校生と寝食を共にしてディスカッションを行う研修に参加した高等部生が、それぞれの観点から国際交流の意義について意見を交わした。これから海外に行ってみたい、という高等部生にとって大きな刺激になったと思われる。
 - ・さらに、春休みには 10 泊 11 日でボストン・ニューヨーク研修を開催することになり、25 名が参加することになった。ハーバード大学にて現地の学生とディスカッションをしたりホームステイを経験し、ニューヨークでは国連本部を訪れるなど、アカデミックな英語を体験することを目的にしている。
 - ・1 月には International Online Exchange という海外の高校生とオンラインで国際交流をする企画を開催した。26 名の生徒たちが参加し、様々な国の生徒たちと英語を通じて自国の特色ある文化について意見交流を行った。
 - ・様々な国際交流イベントに生徒たちは参加した。夏休みには、関西学院大学が主催する他校の高校生と日本に來ている海外からの留学生との国際交流イベント「高校生国際交流の集い」に 3 名が 1 泊 2 日で参加した。TOMODACHI Toshizo Watanabe Leadership Program にも 1 名が参加しアメリカで 2 週間近く研修を受けた。また高等部生としては初めて AIG 高校生外交官プログラムに合格した生徒が 2 週間に渡りアメリカからの生徒と共に京都で研修を受けた。その他様々な課外活動に参加する生徒が見られた。
 - ・探究型カリキュラムにおいては、教育目標である「SDGs の達成を目指し、Mastery for Service を体現する世界市民の一員として、国内外の社会に自ら関わり貢献できる力を身につける」のもと、各授業を中心に様々な取組、イベントが展開された。以下は一例である。
1. 2, 3 年の「グローバルスタディ」においては、Zoom を通じて定期的に海外の高校生と積極的に意見を交わしながら協働プロジェクトに取り組むなど、国際的な視点を得ながら学びを深めた。3 年生の 1 名は 12 月に文部科学省主催の「全国高校生フォーラム 2024」に出場、全国の SGH/WWL 校が集まった東京会場で、英語でポスタープレゼンテーションを行った。
 2. 探究型授業をさらに広げるために、本年度より 2 年生の必修選択授業として 2 科目「福祉探究」と「エネルギー思考」を新しく開講し、2, 3 年生と合わせて 12 科目の特色のある探究授業を展開した。それぞれ生徒たちの関心のあるテーマに沿った探究学習を進めている。
 3. 1 年生の探究 Basic においては、例年同様、自分たちの関心のある社会課題に実際に取り組んでいる 10 以上の地方自治体や企業などを訪れ、インタビュー

ーを行うなどのフィールドスタディを行った。

4. 1, 2 年生の学年行事として、今年度も SDGs について理解を深める学年行事を開催した。1 年生は「宇治探究」と題して校外 HR で訪れた宇治についての新聞を作成し、2 年生は「地域探究」と題して、地方自治体が抱える問題（ミッション）を、グループごとに実際にその地域を訪れて解決方法を探り、発表するという活動を行った。また、今年度の 2 年生の修学旅行では行き先に台湾と東北が含まれることになり、探究的要素を取り入れた学びが展開される。
5. 夏休みには「探究キャンプ」と題した 1 泊 2 日の合宿が関西学院主催で千刈キャンプで行われ、高等部生 9 名も全国からの高校生と共に参加した。大学院生がメンターとなり生徒にきめ細やかな指導を行い、また教員も研修を受けることができた。「探究の集い」につながるイベントとして大きな成果を得ることが出来た。
6. 12 月には 3 回目となる高等部主催、Classi 株式会社と関西学院大学の後援で「中・高生 探究の集い 2024」を開催した。全国から 32 校、200 名程度の生徒と教員が参加し、各学校の探究活動をコンテスト部門、オープン部門（ポスター発表）で披露した。高等部からは 4 グループがエントリーし、高等部生が主体的に運営に関わった。参加者全員にとって学びの多い一日となった

（取組の効果に対する評価）

- ・「授業や行事を通じて国際的な問題や世界の出来事などに興味・関心が強くなってきたと感じる（生徒）/高める努力をしている（保護者・教員）」という項目について、生徒（質問 31）は約 85.8%（昨年比+2）、保護者（質問 22）は約 82.6%（昨年比-3）、教員（質問 45）は約 91.0%（昨年比-1.9）の肯定的な回答を得た。生徒の回答については 2020 年度と比較して 10%ポイント程度上昇している。ここ数年は全体的には横ばいが続いているが、様々な学内外の国際交流関係のプログラムと共に、色々な授業や学年行事などを通して、多くの生徒たちがそれらについて考えるきっかけを提供できているのではないかと感じる。
- ・「授業や行事活動で、語学力や国際性を身につけることができるプログラムなどが高等部で提供されている」という項目について、生徒（質問 32）は 89.7%（昨年比+2.9）、保護者（質問 23）は 84.0%（昨年比-0.5）、教員（質問 46）は 96.4%（昨年比+3.6）となっており、昨年度とほぼ同様の高い水準で肯定的な回答を得た。これも生徒の回答については 2020 年度と比較して 10 ポイント程度上昇している。英語科の授業で導入している Weblio オンライン英会話授業も 4 年目を迎え、英語科主催の英語スピーチコンテストも 2 回目となった。海外研修も年に 3 回、クラブの海外遠征、海外提携校のホームステイ受け入れを 2 回実施することが出来た。今後さらに様々な機会を提供していきたい。
- ・「将来、機会があれば留学や渡航をしたいと感じている（生徒）/意欲を育んでいる（保護者・教員）」という項目について、生徒（質問 33）は 80.3%（昨年比+3.1）、保護者（質問 24）は 74.9%（昨年比-0.5）、教員（質問 47）は 90.9%（昨年比-0.2）が肯定的な回答であった。生徒たちの意識は、コロナ禍の影響があった 2020 年度から 10 ポイント以上上昇しており、保護者、教員もそれぞれ 15 ポイント以上上昇している。海外に行ける機会が実質的に増えているので、生徒たちの意識がより海外に向くようにさらに促したい。
- ・「授業や行事などを通して、生徒が社会的課題に対して関心を持ち、取り組もうとする姿勢を育んでいる」という項目については、生徒（質問 12）87.2%（昨年比+0.1）、保護者（質問 6）は 90.0%（昨年比+0.7）と、両者共に昨年度とほ

	ば変わらない高い水準での肯定的な回答を得ることができた。2020 年度と比較しても 15 ポイント近くの上昇となる。教員（質問 18）についても 90.9%（昨年比-3.8）と高い水準を維持している。これについても学年・学校行事、国際交流部、探究型授業の取り組みなど、全学的な広がりを今後はもっと質の高いものにしていきたい。
今後の方策	● コロナ禍の影響のあった 5 年前と比較し、全ての関連質問項目において 10% から 15% の肯定的回答数の上昇が見られることは前向きにとらえたい。受け身ではなく、主体的に「関わりたい」と思えるような魅力的な国内外の国際交流プログラムをさらに生徒たちに提供していきたい。 ● 来年度も今年度同様、探究型授業をさらに増やすことなどを通して探究的な学びをさらに充実させていくことを構想している。答えのない問いに対して、生徒たちが主体的に取り組み、大学での専門的な学びにつながるような深い学びの機会を、授業や行事などの多くの場面で展開していきたい。

総合評価

2024 年度は学校における教育活動がコロナ禍前に戻った状態での評価となり、評価の比較検証としてはコロナ禍以前の比較も念頭に置いての評価となり、コロナ禍時の評価との差異も見られた。

キリスト教主義教育については、変わることなく生徒・保護者・教員ともに浸透していることが結果からも伺え、しっかりと関西学院の理念とともに受け継がれ、確かに共有されており、高等部教育において重要な位置づけにあることが理解されていると言える。特に 2024 年度はボランティア活動において顕著な活動があり建学の精神を体現する場が与えられた。

教育課程・学習指導に関する評価は 2024 年度も「B」とした。昨年度同様に、学習指導要領改訂や観点別評価の導入などに伴い、大学受験に縛られない高等部の教育を適切に測る指標、評価項目の変更・追加を行ってきているが、生徒・教員ともにいまだ従来の観点から脱していないところがまだあり、それがアンケート結果に表れていると考える。

高等部の教育の軸となる主体的な学び・探究型の学びが、より高等部で広がるために、新しい講座の開設や生徒への説明をしているが、探究型授業への学びの理解の違い、学力観の違いが評価においても「乖離」という形で表われている。今後も「探究型カリキュラム委員会」も拡大し、多くの教員がその手法や評価法などについて実践と研修を重ねながら、教員の理解の深化とそれに伴う生徒への関心を引き寄せる地道な活動の積み重ねで前進を図ることとする。教員を含め、すでに理解のある層ではないところへのアプローチが課題である。また、高等部教育での一つである選択授業そのものの見直しも着手したが、総合的観点から見直しをしていく。

進路指導、関西学院大学への接続に関する情報については、生徒・保護者・教員とも情報を得られているという実感を持っており、大学進学にとどまらない広義での進路指導、広く生き方に関わる指導には一定の理解を生徒、保護者、教員とも有している、AiGrow の活用での自己分析や大学進学にとどまることのない進路指導には十分には至っておらず、生徒・教員ともに的確な分析と、それをもって進路指導につなげる手段などの改善には、まだ着手できていないままとなってしまった。

生徒指導面においてはほぼ例年通りの評価結果であるが、大きな指導方針は保護者にも十分な理解を得ているが、明確なルールについては明示しているものの、教員側の指導にばらつきがあり、教員内での不統一感を感じていることがうかがわれる。問題行動やいじめに対する姿勢や対応については 2024 年度もよい評価を得ていることから、学校としてのこれらの問題等に対する迅速な対応と、それらに対峙する姿勢が一定の評価を得ていると考える。

教育環境整備に関してはここ数年、生徒・保護者・教員から高い評価を受けており、また生徒の要望を汲んだ改善、食堂のリニューアルを行ったこともよりよい評価へとつながった。ただ、目標に掲げた探究型授業を見据えた教育環境整備については構想としては構築したが、具体的にリニュ

ーアルを行うという法人との決定にまでまだ至っておらず、早急にその段階に入っていく場を整えなければならない。

人権教育は、その理解を深めるための新しいプログラムや様々な形でのアプローチがさらに今年度進み、前進を遂げている。生徒の人権教育への評価も向上し、教員も担任として関わる場が増えたことでその意識の変化が評価からうかがえる。しかし、まだ改善の余地があり、目標が十分に達成できていないとの判断から評価は「B」となっている。特に、保護者にはその成果がよく見えないのも事実であり、また「自分事」として考える機会がまだ不十分であることも課題としてある。

国際理解教育においては、オーストラリアの男子校提携校からの訪問受け入れと、その学校への英語研修旅行があり、また今年度新たに同じくオーストラリアの女子校と提携校締結をした。それにより女子生徒のホームステイの拡大や国際交流活動が大きく広がった。さらに新たな企画、試みも重ね、また春休みにはボストン・ニューヨークへの研修の実施も決まり、生徒の海外への関心・態度が上向いたことが確実に評価としても表れている。

教科横断型の「探究型カリキュラム委員会」が設けられ、年を追ってこの委員会に関わる教員を増やしており、高等部の教育目標がさらに精緻に策定・設定され、その理念が広がりを見せている中で、今後の高等部教育全般の改善を推し進めながら「地球と人類に貢献する平和構築のための学び」をもって、関西学院が目指すところのグローバルリーダーである「“Mastery for Service”を体現する世界市民」の育成にしっかりとつなげていきたい。

2024 年度の評価をふまえて 2025 年度に予定している評価項目、テーマ等

(来年度より学校評価の在り方が変更されるということで、その結果を受けて検討することとする。)

第三者評価／学校関係者評価

文化祭を訪問しました。ラテン語「Plus Ultra」をスローガンとした今年の文化祭は、コロナ禍を超えた現在だけでなく、コロナ禍以前の伝統をも超えた未来を予期させる、非常に活気あるものでした。高校生の文化祭はとかく内輪向けになりやすいですが、高等部の文化祭の企画や出店には、一人で参加した「おじさん」にも入りやすいものも多く、存分に楽しめました。また、泣いている子どもに、同じ目線にしゃがんで声をかけていた生徒の姿も印象的でした。そうした些細な振舞いにも高等部での学びの証を認めることができ、とても有意義な訪問となりました。

高等部の大きなイベントとしては、「中・高生探究の集い 2024」が開催され、今年も 30 校を超える全国の中学・高校の生徒が集い、探究活動の成果を発表しました。またダンスステージ「4 代目ロイロボーイズ記念講演」が一般公開イベントとしてはじめて開催され、多くの来場者を迎え盛況に終わりました。華やかなイベントの成功を喜びながら、その背後にあった生徒の皆さんの日頃の研鑽と仲間たちとの協働、そして先生方、関係者、保護者の皆様のご支援を想いました。

堅 今年度の学校評価では、アンケート結果の分析に際し、複数の質問項目で「強くそう思う」の割合が減ったことが憂慮されているようです。しかし、たとえば食堂リニューアルのような目に見える大きな改善があったにもかかわらず、施設・設備の整備状況の項目（質問 25）では「強くそう思う」が 48.8%→37.9%と減少しています（ただし「強くそう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合算は 86.9%→88.5%と微増）。質問項目により異なるでしょうし、またおよそ 2/3 の回答者が昨年度と同一であることをふまえると一概には言えませんが、「強くそう思う」の減少それ自体に敏感になりすぎなくてよいように思っています。

各評価項目へのコメントは以下の通りです。

<キリスト教主義教育の実践>

調に目標が達成されているものと評価します。「わずかに評価が下がった」ところはありますが、他の目立つプログラムによるものと私も考えます。早朝祈祷会の出席者もわずかに減少していますが、コロナ禍前（たとえば 2019 年度平均出席 125.7 名）に比べると、大幅な増加の状態を維持して

います。能登半島地震の被災地ボランティア派遣、頭が下がる思いです。引き続きキリスト教主義教育の浸透に尽力ください。

<教育課程・学習指導>

探究科目・選択科目の拡充、ならびに地域探究プログラムの定着が進められました。教育課程・学習指導の充実に尽力されていることは、教員における否定的な評価の減少からもよくうかがえます。他方で、課題として、いくつかの項目における「強くそう思う」の割合の減少、ならびに生徒と教員・保護者と教員の評価結果の乖離が判明しました。教員の努力が生徒・保護者の実感に結び付くには、いましばらくの時間も必要ですから、「まずは焦らず」というのが第一の感想です。付言するなら、「高等部らしい学び」の共有・浸透が大きなカギになると見受けられました。一般的に、選択科目の数が増えても、しばしば生徒は「選択肢が増えた」と思うだけで、学びの主体性を実感するまで至りません。「なぜその授業を選択し、探究学習に取り組むのか」を考え続けることを通して、自らの学びの主体性を実感していくことになります。そうした思考を促す工夫として、(もう高等部では取り組まれているかもしれませんが)自らの学びのヴィジョンを作成させて選択科目のマッピングをさせたり、場合によっては新しい授業の提案を生徒にさせるなどの取組もあるようです。私見ですが、高等部の学びには「社会的課題への関心」という通底音を感じます。「自分が取り組んでいきたい社会的課題」を考え、その選択的で探究的な学びを継続する先に、大学以降の進路選択が見えてくる——そうした教育課程・学習指導は、「高等部らしい学び」と呼ぶにふさわしいものと思われました。AiGrow の活用とともに、引き続き検討を進めてください。

<生徒指導>

目標は十分に達成されているものと評価します。大きな事案が数年前にありましたが、それに学校全体を挙げて対応したことの成果が今も持続しているからでしょう。評価が若干下がっていることに関しては、当時の対応を知らない生徒が増え、また同様の事案がなかったことの結果という分析に同感です。教員間の意思統一をはかりつつ、引き続き尽力いただきたいと思います。

<教育環境整備>

食堂の全面リニューアル、歓迎の声を多く聞きました。嗜好の多様化と健康な食事の提供という二つのニーズに適切に対応できる環境が整えられたこと、高く評価します。ICT 環境や校舎のリニューアルに関しては、公立校でも(学校統廃合と同時進行ですが)大きく前進している現状です。引き続き法人との交渉に粘り強く取り組まれることを望みます。

<人権教育>

世界的に紛争が大きな問題となる中、今年度はレイシズムというテーマに取り組み、生徒にもその効果がうかがえていること、高く評価します。保護者の評価の低さに関しては、レイシズムが「自分事」や家庭での話題になりにくいテーマだったこともあるのでしょうか。ただ、レイシズムは世界市民には必須のテーマです。生徒や保護者が話題にしやすいテーマ選びに走る必要はなく、「高等部らしい」テーマ選択を今後も継続してください。「人権 Day」のような企画には賛成です。期待しております。

<国際理解教育>

今年度も数多くの機会を設け、国際理解教育の充実が進んでいます。「やっぱり楽しい！国際交流！」という国際交流の研修に参加した生徒の発表機会が新たに設けられたことは特筆すべきでしょう。自分だけの貴重な経験も、なかなか友人たちに改まって伝える機会は少なかったでしょう。みんなの前に立ってその経験を言葉にすることで、自分の貴重な経験を振り返り、自分の中で咀嚼できたものと思います。また、友人の言葉に耳を傾け、自分もそうした経験をしたいと思った生徒も多いことでしょう。高等部の在学中では叶わなくても、大学入学後の留学などに結び付くかもしれません。円安など留学に躊躇する理由も増えていますが、変わらず国際理解教育が進むことを願います。

今年度は11月25日と12月14日の2回高等部を訪問しました。

11月の訪問の際には全校礼拝、各学年の学習参観、校内視察をしました。毎年全校礼拝に参加していますが、今年も祈りの習慣を守る誠実さ、聖書の言葉と教える謙虚さ、学校生活を謳歌する若さを全校生の中から感じました。このような日常を通して高等部生の Spirituality が育ち、学内に価値観と文化を醸成し、関西学院高等部の存在理由と価値を社会に示されていることをあらためて認識しました。

学校全体の学習環境は質素で清潔に保たれ、機能的に運用されていることがわかります。特に改装された食堂は、魅力的で明るい共有スペースが創出されました。

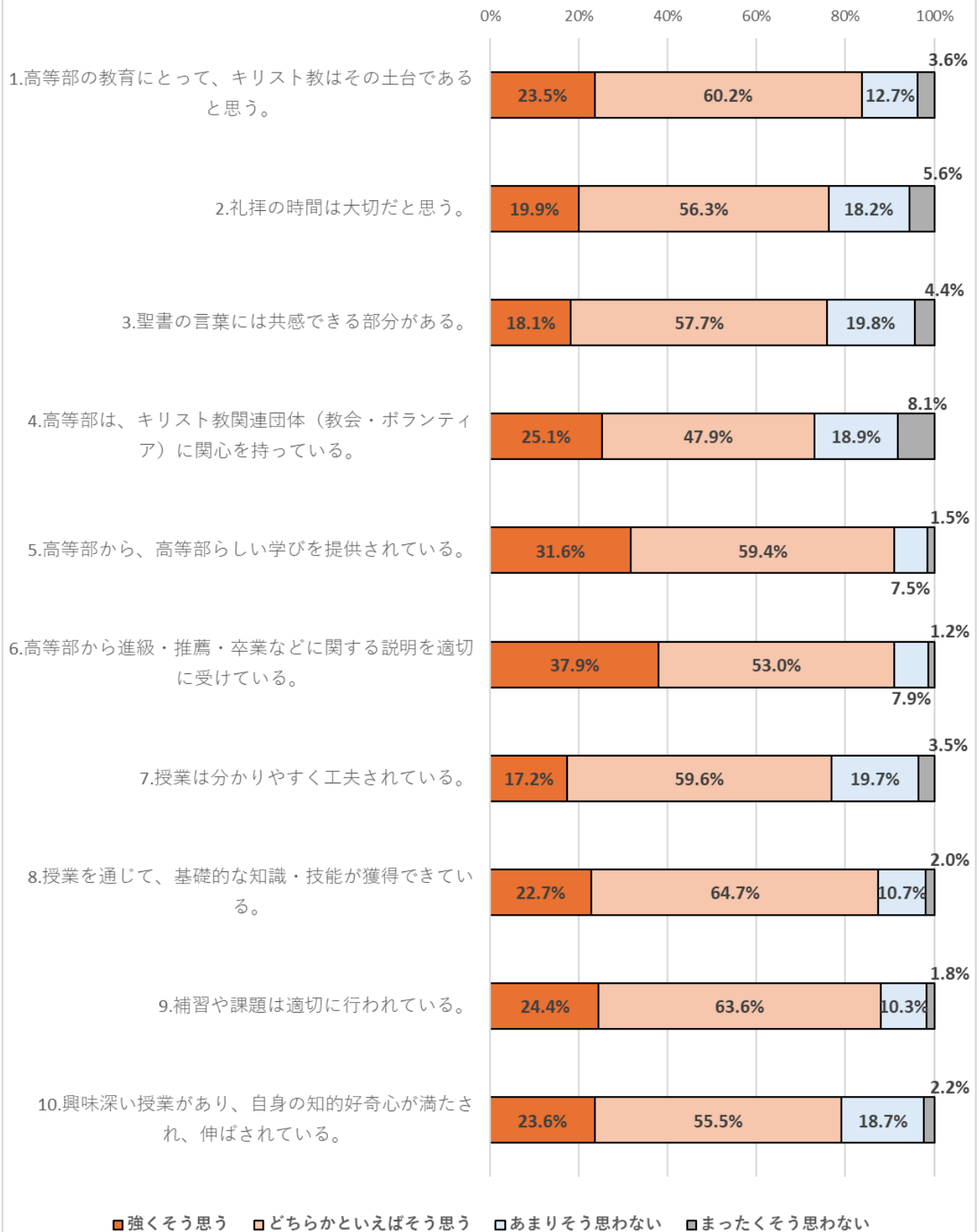
12月は『探究の集い』に合わせて訪問させていただきました。探究学習が多くの学校で導入されたことで、あらゆるレベルのワークショップやコンテストが乱立しています。関西学院高等部が毎年開催されるこのイベントは質も内容も規模も他との比較にはなりません。今年も関西学院千里国際高等部から代表が参加し、深い学びの機会を得ました。関西学院大学の先生方をはじめとする審査員の方々も、当日の指導講評にとどまらず発表者一人ひとりに後日フィードバックを送ってくださる丁寧さと専門性にも感銘を受けました。全校をあげて探究型の学習を推進されていることを外部にも示すイベントであると同時に、他校の生徒や教員にとって貴重な研修の場を提供していることに感謝いたします。今後の高等部の教育実践を期待しています。

今年度も高等部生は国内外で様々な課外活動に参加され、素晴らしい成果をあげられています。そして、高等部として良質な刊行物も多数発行されています。まさに学校としての存在感を内外にしっかりとアピールされています。

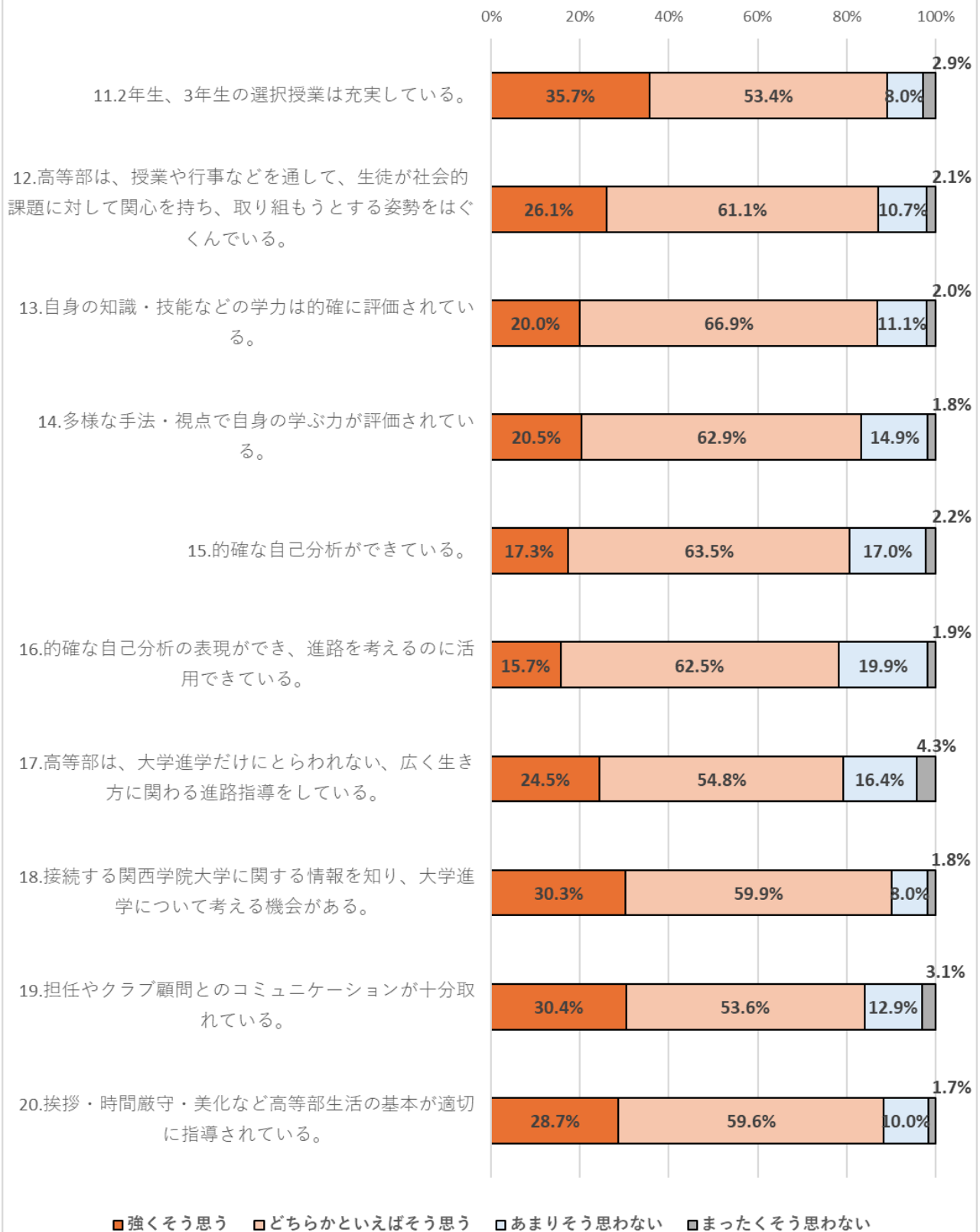
高校は毎年全体の三分の一の生徒と保護者が入れ替わります。学校のコミュニティーに加わる新しいメンバーが学校の持つ特徴や良さを認識するには時間がかかります。ですから、アンケート結果のデータに前年度と僅差があらわれることは予想内の傾向だと思われます。関西学院高等部は2024年度もすべての評価項目で良い成果を出されています。そして「今後の方策」の中で提示されていることが次年度には順調に実践されていくことでしょう。

2024年度学校評価

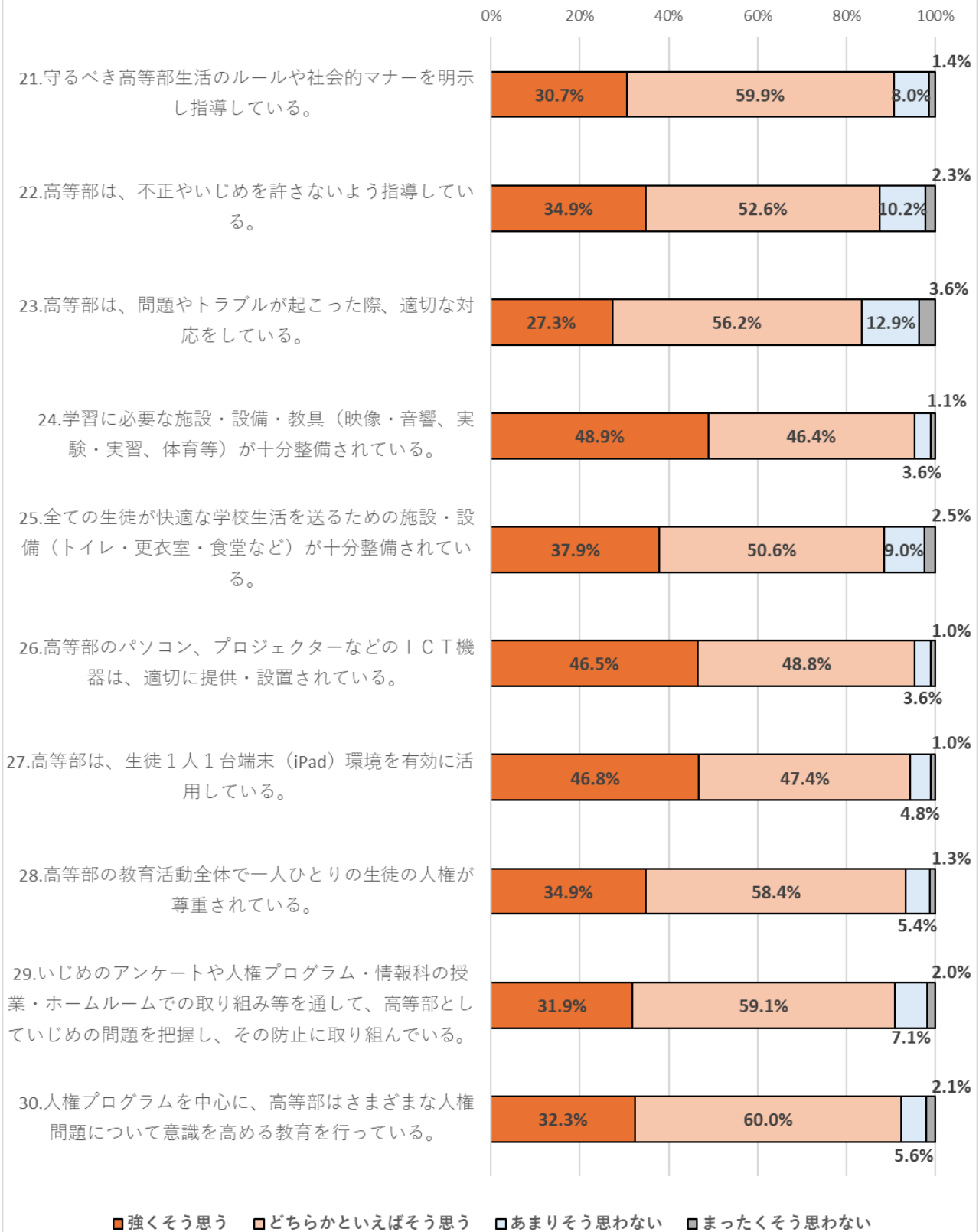
2024年度 学校評価アンケート集計結果
高等部・生徒（回答率 93.6% 回答1,070人/対象1,143人）



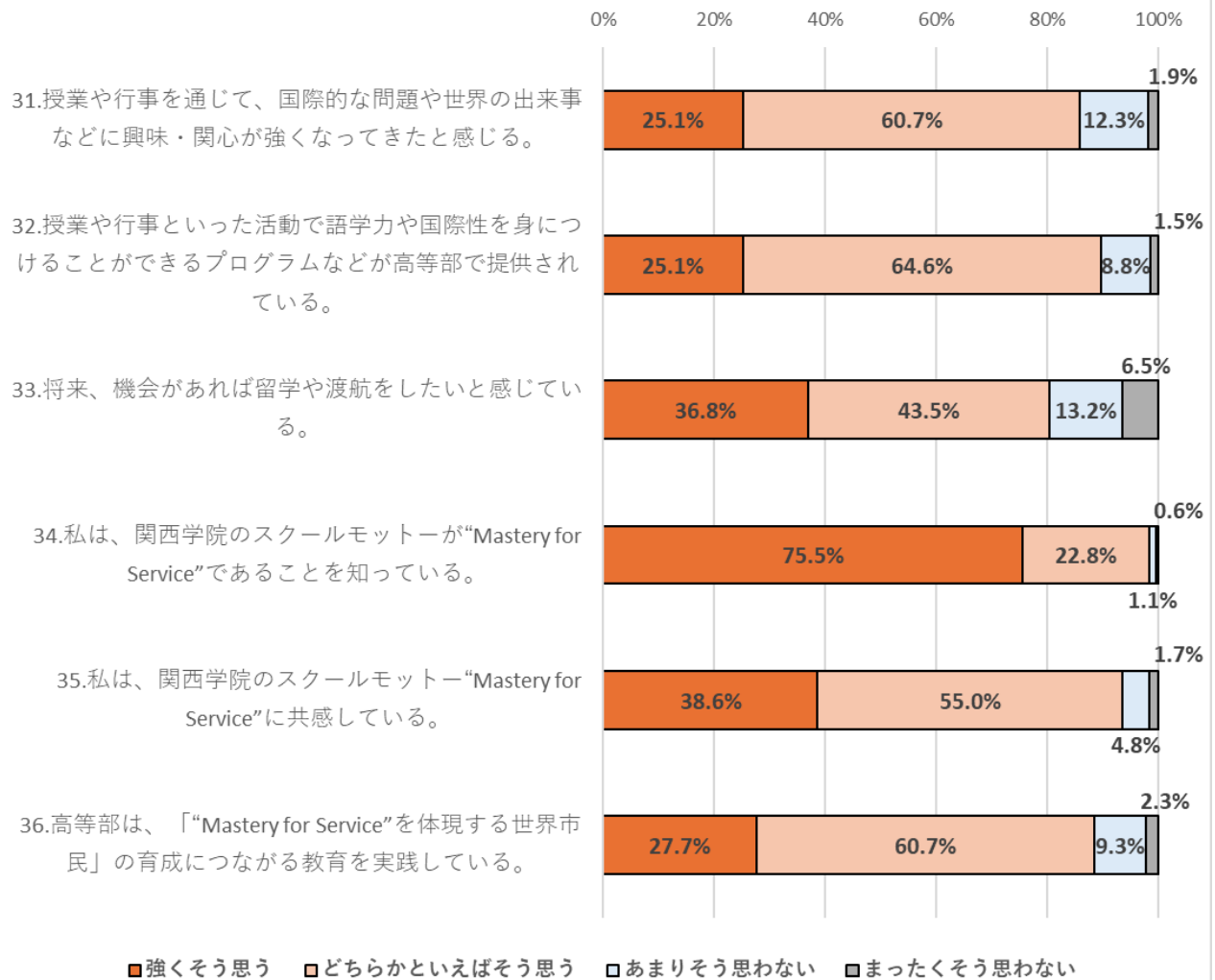
2024年度 学校評価アンケート集計結果
高等部・生徒（回答率 93.6% 回答1,070人/対象1,143人）



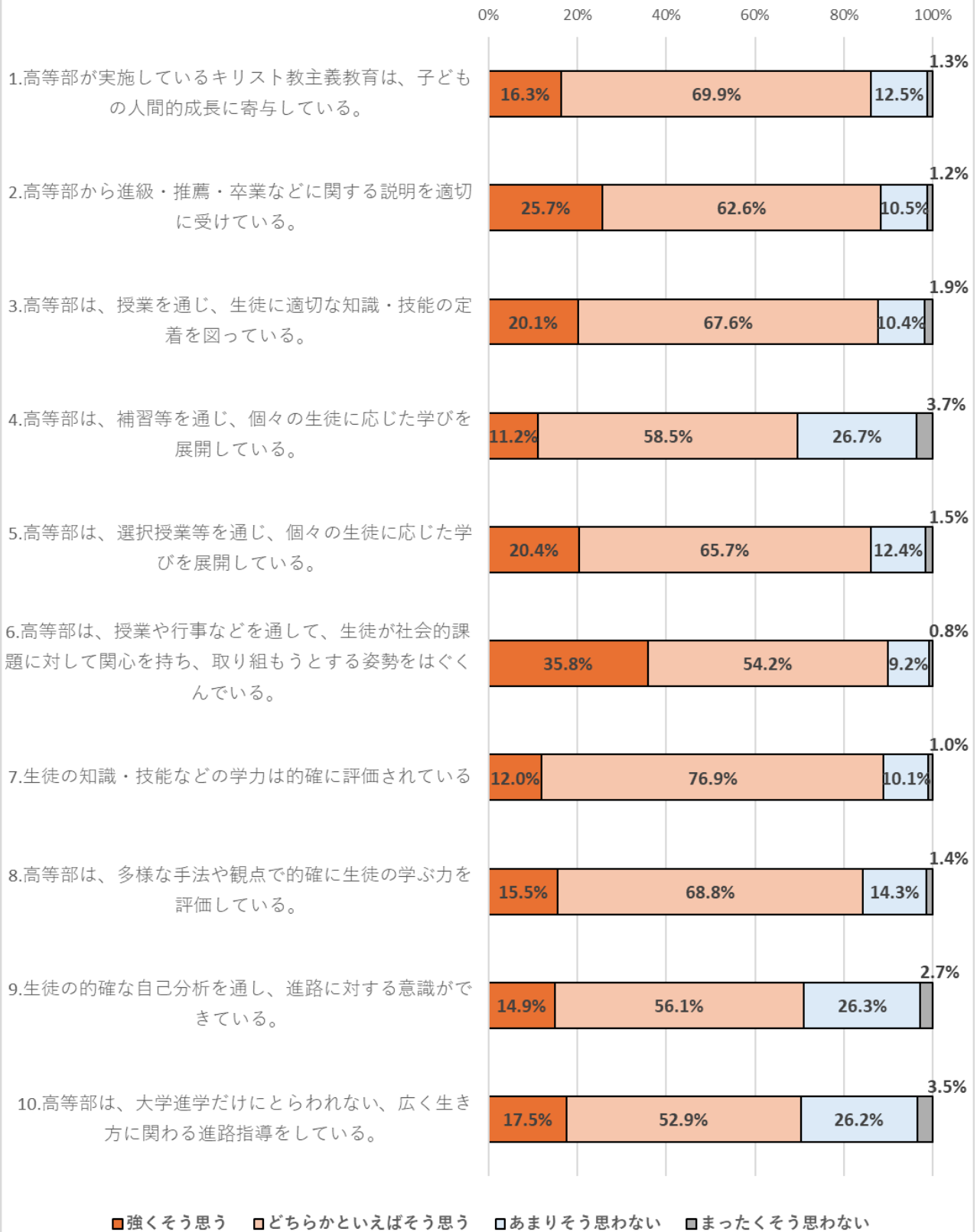
2024年度 学校評価アンケート集計結果
高等部・生徒（回答率 93.6% 回答1,070人/対象1,143人）



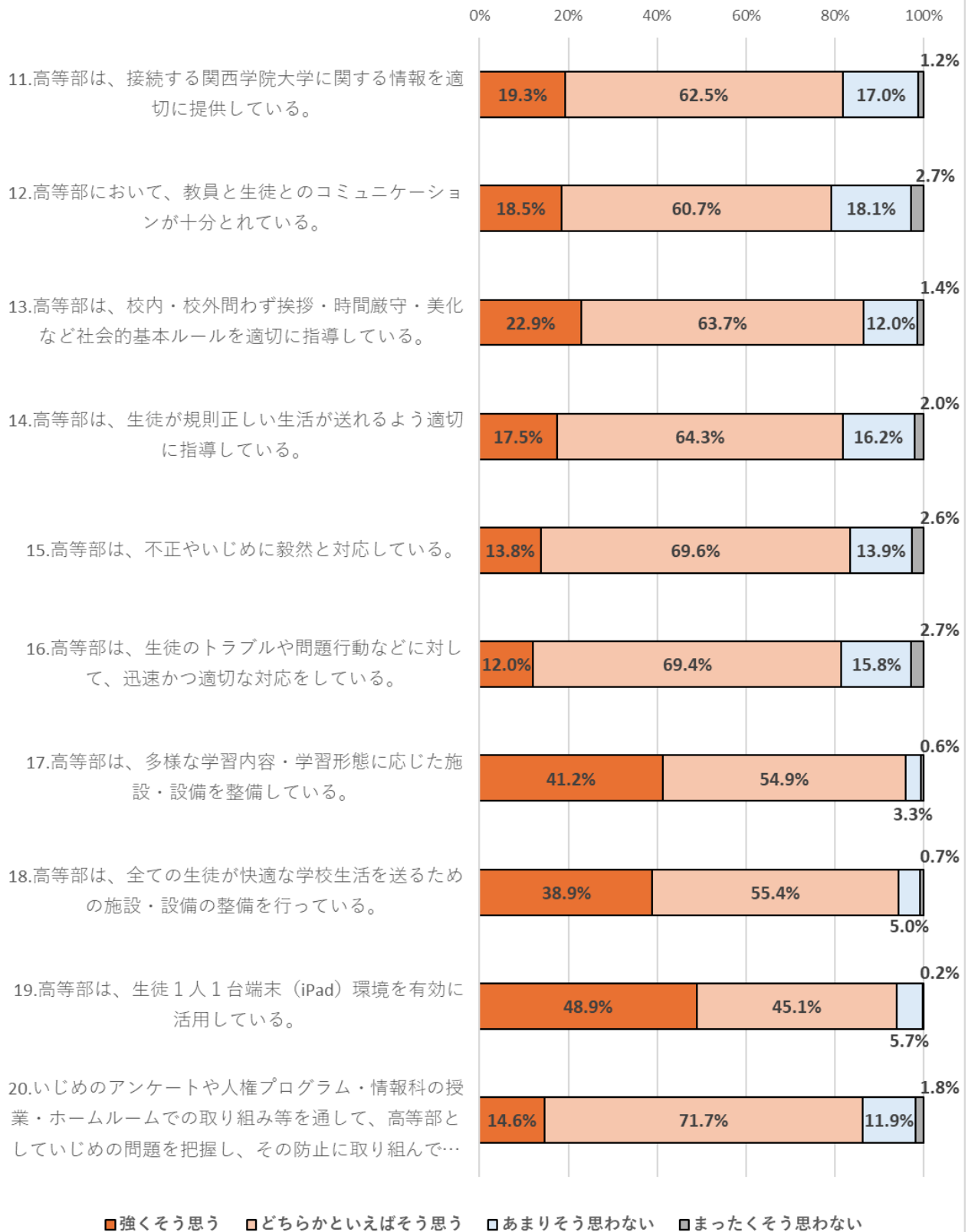
2024年度 学校評価アンケート集計結果
高等部・生徒（回答率 93.6% 回答1,070人/対象1,143人）



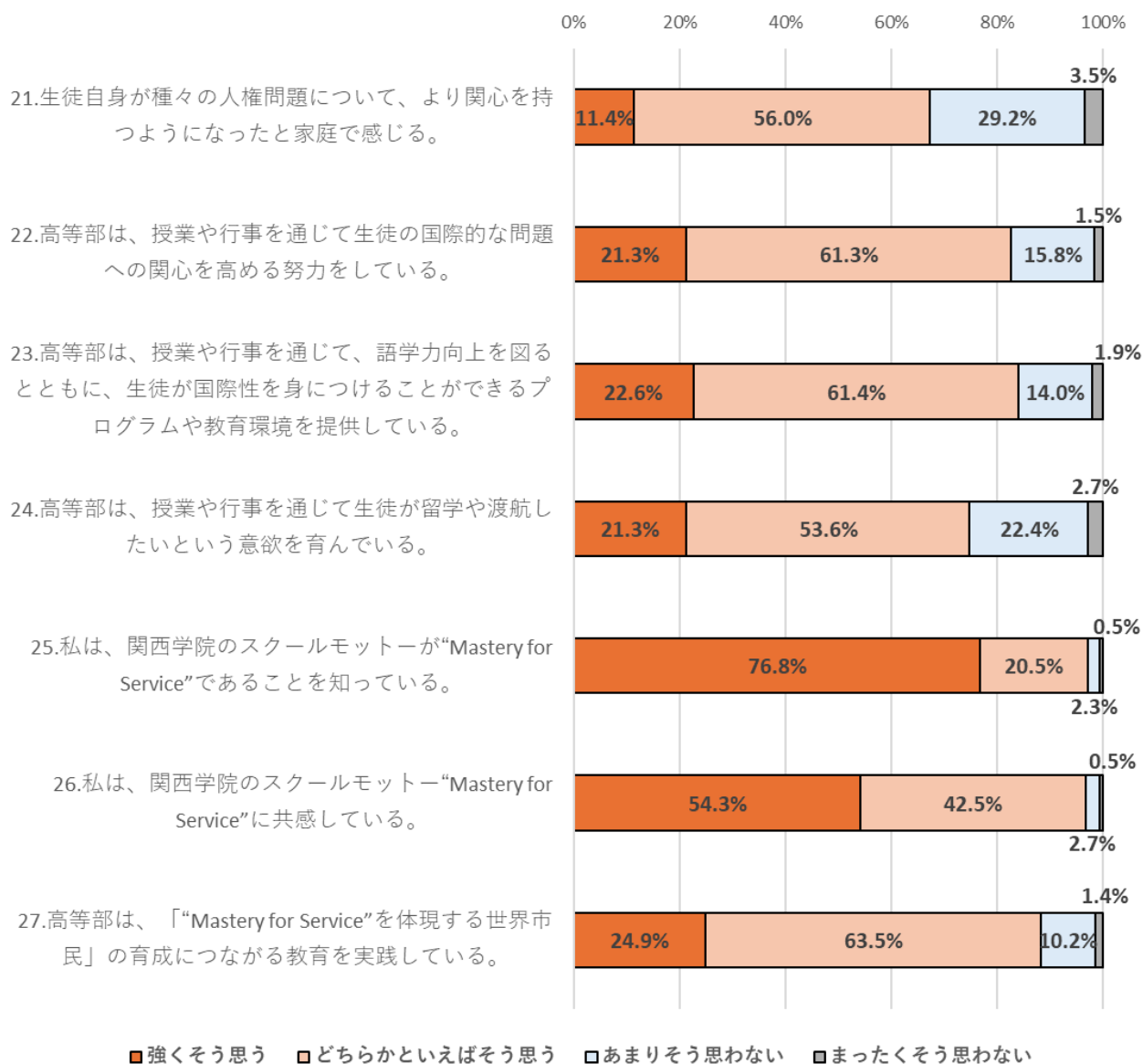
2024年度 学校評価アンケート集計結果
高等部・保護者（回答率 73.5% 回答840人/対象1,143人）



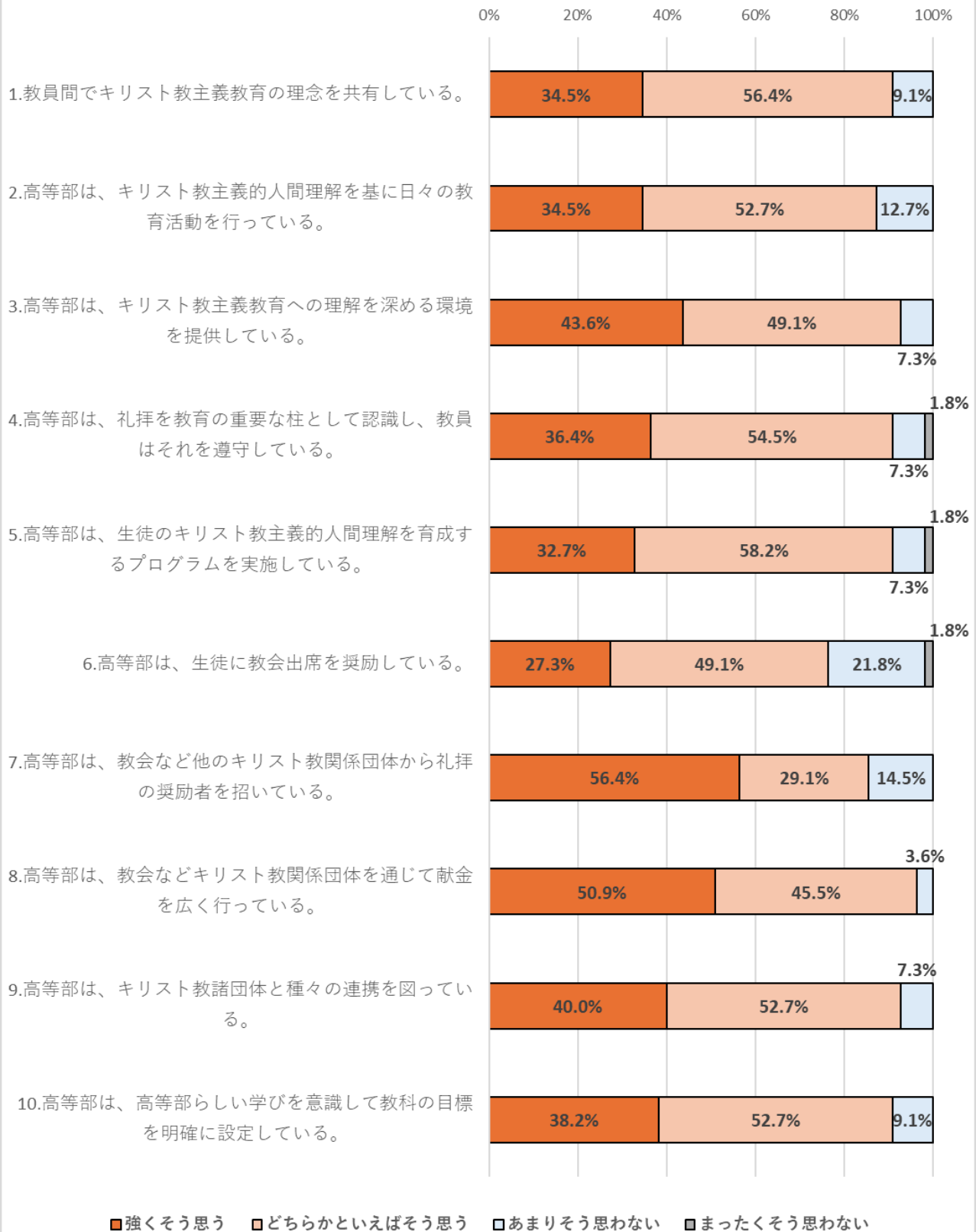
2024年度 学校評価アンケート集計結果
高等部・保護者（回答率 73.5% 回答840人/対象1,143人）



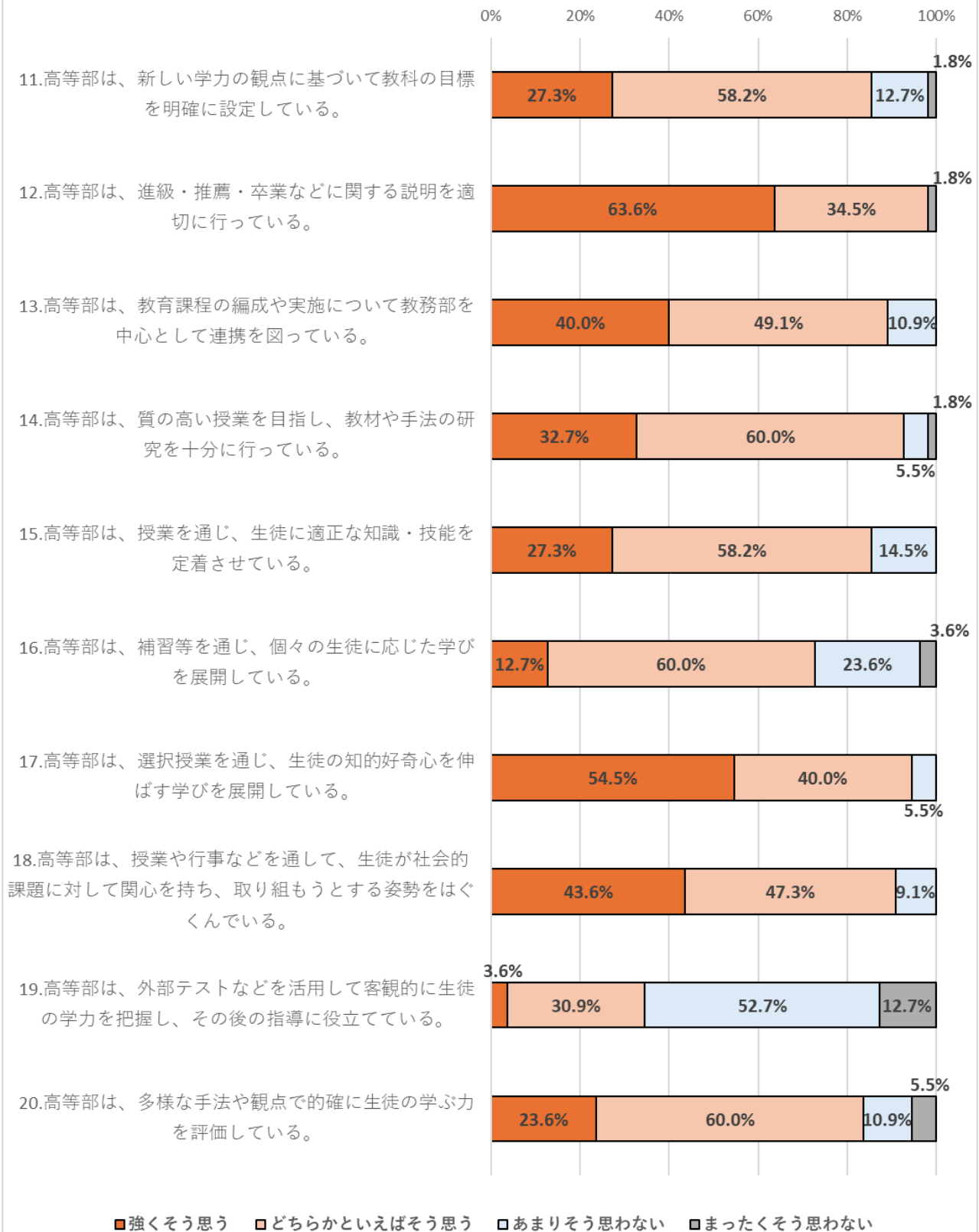
2024年度 学校評価アンケート集計結果
高等部・保護者（回答率 73.5% 回答840人/対象1,143人）



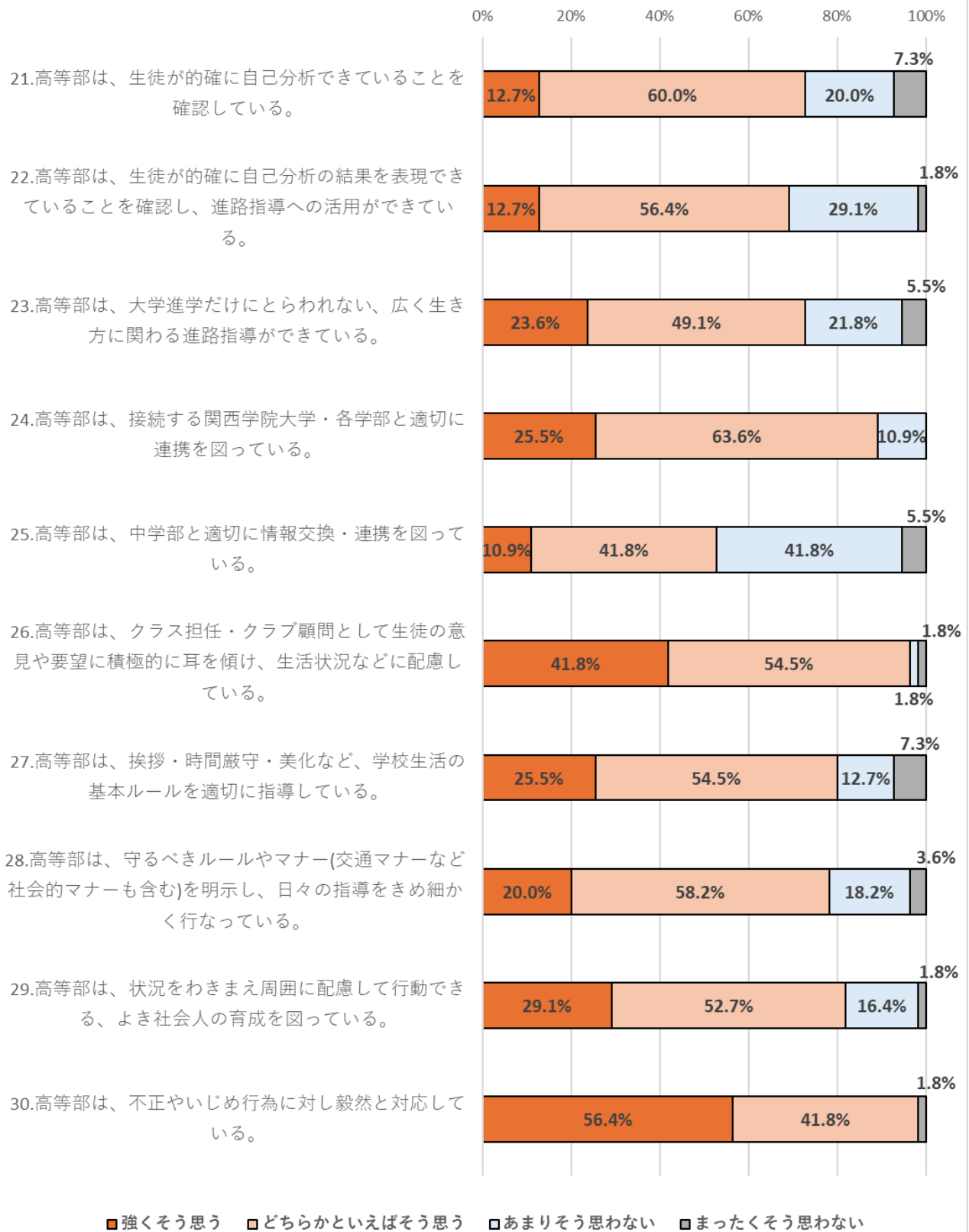
2024年度 学校評価アンケート集計結果
高等部・教員（回答率 100% 回答55人/対象55人）



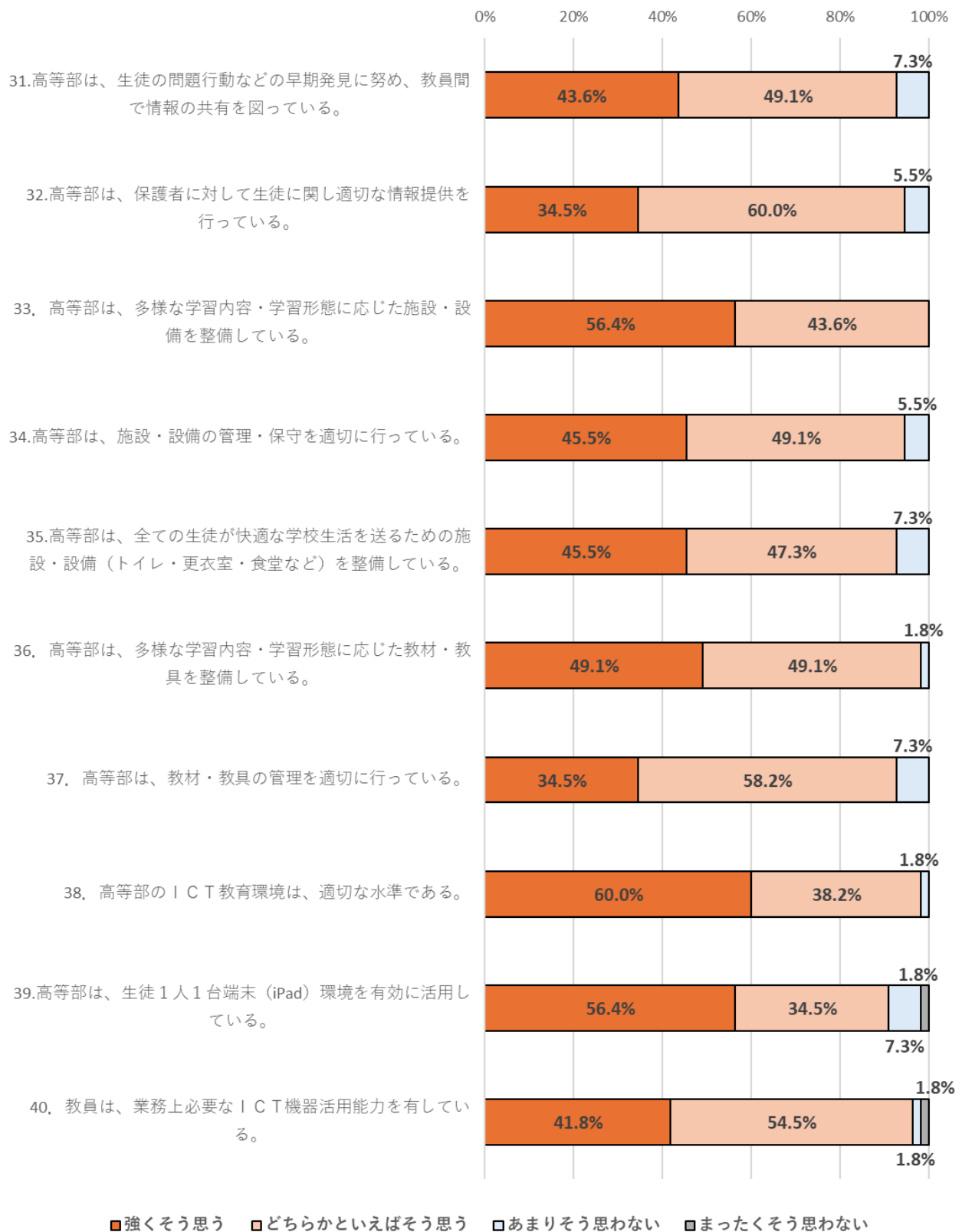
2024年度 学校評価アンケート集計結果
高等部・教員（回答率 100% 回答55人/対象55人）



2024年度 学校評価アンケート集計結果
高等部・教員（回答率 100% 回答55人/対象55人）



2024年度 学校評価アンケート集計結果
高等部・教員（回答率 100% 回答55人/対象55人）



2024年度 学校評価アンケート集計結果
高等部・教員（回答率 100% 回答55人/対象55人）

